

福 井 県 医 師 会

だまり

第555号 平成19年(2007)9月



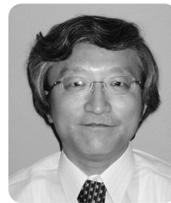
表紙写真説明：初秋の越前海岸

海を描くのはなかなか難しい。一面の海原を描き表せないのである。この絵もかなり苦勞したが、これからも海を描き続ける気持ちにさせてくれた一枚である。

福井市 加藤 初夫

麻疹対策について

学校保健担当理事 若 林 正三郎



近年の学校保健分野での課題としては、所謂心の健康問題としての青少年期のうつ病の急増や高機能自閉症などの発達障害、気管支喘息などのアレルギー疾患の増加、小児のメタボリックシンドロームに代表される生活習慣に係る健康障害などがありますが、児童生徒が罹る病気として感染症はなお大きな位置を占めています。環境衛生や健康管理の向上と予防接種の普及により、一昔前と比較して重大な感染症の脅威にさらされることは確実に少なくなりました。しかしながら、新興感染症として2003年のアジアにおけるSARSの流行や、ここ数年で急激に増加している鳥インフルエンザと危惧されている新型インフルエンザの発生など、いまだ十分には解明されていない疾患も出現してきています。日本においても昨年末のノロウイルスによる集団食中毒の全国的な発生は記憶に新しく、さらに今年に入ってからの南関東地区に端を発した麻疹の流行は、ワクチン予防可能疾患に対する我が国の対策が他の先進国のみならず途上国にすら大きく遅れをとっている現状を改めて認識させることとなりました。

麻疹には苦い思い出があります。昭和61年、初期研修を終えて小児科一人医長として赴任した病院でのことです。外来で、3日前からの発熱とカタル症状、眼脂のある4歳くらいの女児を診ました。発疹はなく、頬部の口腔粘膜に1〜2個の粟粒大の白色斑を認めました。感染源は不明で、予防接種未接種の子でした。研修医時代に麻疹の流行がなくほとんど臨床経験はなかったのですが、本棚の陰で教科書をめくって読み「ひょっとしたら麻疹かな?」と思い、明日もう一度受診するように伝えて帰宅させました。はたして翌日、患児には鮮紅色扁平な発疹が顔面体幹に出現しました。あわてて隔離をして、待合室などで接触が確認された他の予防接種未接種児にはγグロブリンを接種しましたが、前日から受付や薬局前など病院中を歩き回っていたので、誰に感染させているか分かりません。1週間後くらいから、二次患者が次々と発生することになってしまいました。疑い段階からの隔離や院内での情報の共有、家庭や保育園への連絡が遅れたため、初期段階での封じ込めに完全に失敗してしまっただけです。当時は麻疹の予防接種実施時期が現在よりも遅めだったので、もっと積極的に行政にも働きか

けて未接種者に早急な対応を呼びかけるべきでした。結局11月頃から翌年の5月頃までに小児科だけで患者数は100人を超え、肺炎などの合併症のため30人以上が入院する大流行となったのです。

感染症発生動向調査によれば、今年の麻疹流行の特徴として15歳以上の成人麻疹の増加が挙げられます。小児の麻疹報告数は第17週項より増加していますが第26週までの累計では1943例と過去10年間で3番目に少ないのに比して、成人麻疹は第11週項より急増し第26週までの累計でも655例を数え、過去10年間で最も多くなっています。本県においては小児の麻疹が第19週に2例、第20週に2例、第22週に2例、第25週に1例の計7例、成人麻疹が第22週に1例の報告がなされています。幸い第26週以降は発生の報告はありません(第29週現在)。全国でも第27週時点で小児の麻疹が93例、成人麻疹が26例とピーク時の3分の1程度になっていて、今後も例年通り減少傾向が続くものと思われます。成人麻疹の問題点として、患者の活動性や行動範囲は乳幼児とは比較にならないほど大きいので、感染の危険が広範囲に及ぶことや、secondary vaccine failureからの修飾麻疹など非典型的の症例が多いことがあります。実際、今年の麻疹発生データベースによれば約2割が予防接種歴ありの患者でした。麻疹は天然痘やポリオと同様にヒトを唯一の宿主とする疾患で、ワクチンによる排除根絶が可能と考えられています。ごく最近の報道では、厚生労働省の検討会で今回と同様の流行を繰り返さないために来年度から5年間の時限措置として、13歳と18歳にワクチン追加接種を行うことが決定されました。計画通り進めば5年後には22歳以下の補足接種が完成することになります。また麻疹の発生動向を現行の定点把握から全数把握に変更することになり、麻疹が1例発生した時点で迅速に感染拡大防止対策を実行できるようになることが期待されます。そしてかかりつけ医としては何よりも1歳6ヶ月健診や3歳児健診、就園就学時の定期検診の場での接種の確認や勧奨と、広域化などにより予防接種の機会を出来るだけ増やす努力をして第1期、第2期の定期予防接種の接種率を高く維持することが肝要でしょう。